

## ヨーロッパとは何かーアイデンティティ形成の過程ー

—Europe in History: the making of European Identity—

森 貴子 (西洋史)

### 1. 講義の概要

2021 年度後期・月曜日 2 限の外国史 2 は、三回生以上を対象に、上記タイトルで開講された。学期末レポート提出者は 18 名（初等教育コース小学校サブコース 3 回生 11 名、中等教育コース社会科教育 3 回生 6 名、4 回生 1 名）であった。

#### (1) 講義の目的

本講義は、ヨーロッパやネイションといった集団が、そのアイデンティティも含めて歴史的に構築されたものであるとの認識に至ることを目標としている。

この目標を達成するために、「ヨーロッパとは何か」という問いを設定した。その空間としてのまとまりは如何にして形成され、また如何なる歴史的性質を持つのか。本講義では、こうしたヨーロッパ意識の形成過程を、いくつかの具体的事例を取り上げつつ長期的視点から検討した。そしてそこから、地域的アイデンティティの複層性や変容、アイデンティティ形成における歴史の役割、そして「他者」の重要性などを明らかにした。

こうした認識を得ることは、ひいては、近代国民国家の成立以来我々を強烈に縛り付けてきた「ネイション」の相対化に繋がると同時に、紛争をはじめとした現代世界の諸問題を考える際の、糸口にもなると考えている。

#### (2) 講義の詳細

授業は 12 月までは対面での講義形式で実施できたが、1 月中旬は授業担当者の東京出張に伴う在宅勤務期間にあたったため、遠隔授業(非同期型)も実施せざるを得なかった。1 月末には対面講義を復活させたが、遠隔を希望する学生もいたため、以後 moodle に資料をアップする形で実施し、予定していた試験もレポート提出に変更した。そのような状況下でも映像資料を可能な限り視聴してもらう

などして、アイデンティティの形成という抽象的なテーマを、学生ができるだけ身近に具体的に考察できるよう工夫した。まずはなぜトルコは EU に入れないのか、トルコを拒む「ヨーロッパ」とは何なのか、EU を脱退したイギリスの「ヨーロッパ」での位置付けはいかなるものか、などの問いかけをしたうえで、①古代ギリシアにおけるオリエン特文化の受容と近代ヨーロッパにおけるその否定(古代ギリシアの理想化)、②中世におけるヨーロッパ意識の勃興とその内容、③ヨーロッパ各地域におけるゲルマン的要素とローマ的要素の併存、④キリスト教(カトリック)＝ヨーロッパの形成におけるギリシア正教の役割、⑤「他者」としてのビザンツ帝国、⑥地域紙幣(イングランド銀行発行紙幣に対するスコットランドとアイルランドの立場)とアイデンティティ、といった内容を扱った。

### 2. 授業評価の内容と結果

授業評価は、学生に無記名アンケートを実施し、その結果にコメントを付すことで行うこととした。なお、外国史 2 の授業評価は昨年度に続き 2 年連続となったため、昨年度のアンケート結果とも比較しつつ評価した。

アンケートの提出については、匿名性の保証のために一斉に箱に入れるなどの形をとっていた一昨年までとは異なって、最終レポートと同時に moodle を通じて提出してもらうことにした。そのため学生にとっては回答者が特定されてしまう懸念もあったと推察されるが、moodle に提出されたアンケートは一斉にダウンロードして個人と結びつけることはしないこと、また決して成績評価には影響しないことなど、事前に必要と思われる説明を加えておいた。

回答者は小学校サブコース三回生 7 名、中等社会科三回生以上 6 名であった(計 13 名)。

問1～6は、次の五段階で評価してもらい、下表のような結果を得た。

<評価基準>

- 5：強くそう思う（非常に良い）
- 4：ややそう思う（良い）
- 3：どちらとも言えない（普通）
- 2：あまりそう思わない（あまり良くない）
- 1：全くそう思わない（良くない）

<問い>

- 問1：この授業への出席状況は
- 問2：授業のテーマ・目的は、明確でしたか
- 問3：担当教員の説明は分かりやすかったですか
- 問4：配付資料・映像資料は有用でしたか
- 問5：授業の内容、レベルはあなたにとって適切でしたか
- 問6：授業によって考え方が培われたり、得るところがありましたか

評価	5	4	3	2	1
問1	4	5	4	0	0
問2	12	1	0	0	0
問3	7	5	1	0	0
問4	11	2	0	0	0
問5	5	5	2	1	0
問6	6	6	1	0	0

<各問に対するコメント>

問1：ワクチンの副反応による体調不良で何度か欠席した。

問7～9は記述式で回答を求めた。

問7 この授業で良かったと思う点、印象に残った点を挙げてください。

- 授業で用いられていたビデオが非常に分かりやすかった。ビデオを通して授業を受けると、理解しやすかった。組織や集団で形成されるアイデンティティには多様性があり、様々なアイデンティティが複合・重層して確立されていることが分かった。
- 話題の切り口や雑学のようなものが面白かった
- 映像や資料がたくさんあってわかりやすかった。
- 映像資料や配布資料が分かりやすかった。

●画像資料や映像資料と授業内容の関連、板書の明確さ

●映像資料や実際に書籍や史料に触れることができた点です。私は世界史知識が浅いが、映像資料によって理解がかなりしやすかったです。

●様々な資料を拝見できた点。映像資料を貸し出していただきありがとうございました。

●美術館の動画

●歴史資料にたくさん触れることができた点  
●ヨーロッパに対する考え方や固定観念が変わった。

●アイデンティティとは何かについて、外国史を通して学ぶことができた。

●一つ一つの歴史的事象を学んでいくことで、“ヨーロッパとは”や“アイデンティティとは”などの壮大なテーマについて考え、概念的知識を獲得できたことがよかった。

問8 この授業で改善すべき点を自由に挙げてください。

●ヨーロッパアイデンティティ形成に一貫した授業であったが、毎回の授業での到達目標→まとめがあれば非常に分かりやすかったのではないかと思う。「ヨーロッパ」の定義が広く、テストでどこまで述べればいいのか分からなかったため、長文になってしまった。

●板書がしんどかったので、レジュメを用意してもらえると先生の話に集中することができる。

●授業のスピードが速く、分かりづらい部分もあった。

●資料が豊富にあり、サイズやカラーもよかったが、一つ一つの資料の説明を資料の近くを示しておいてくれていると、見返した時に分かりやすくなるためありがたい。

問9 アンデンティティをテーマとしたこの授業を受講して、ヨーロッパや日本という国の特質、ひいては我々の生きる現代世界の諸問題について、考えることができましたか。

●たくさんありました ●はい ●あった

●「包摂と排除」という問題について、再度考えるきっかけとなった。

●メディアで流れる情報を通して考えることがあった。

●自分は考えたことのない自国への強い誇り

をもつ国の存在とその価値観を知ることはできた。

●歴史の中でアイデンティティがどのように作られてきたのか学習し、民族の問題は今まで自分が思っていた以上に複雑で重要なことだと思いました。

●アイデンティティを認め合い、共有しあうことの難しさが明らかになった。

●アイデンティティをどこまで担保するのかが難しい問題だと感じた。

●ヨーロッパの人々が考えるアイデンティティと日本の人々が考えるアイデンティティの違いについて授業で学んだことを生かしつつ、自分でも考えることができました。

●改めて自分が日本国民であることを理解することへとつながった。

●問7でも述べたように、組織や集団におけるアイデンティティは、時代と共に様々な考え方が混ざり合い、多様性をもって、様々なアイデンティティが複合・重層され形成されていることが分かった。ヨーロッパと一概に捉えるのではなく、ヨーロッパの中にある異なったアイデンティティについて考え、ヨーロッパとしてどう成り立っているのか考えることができた。今まであまり考えたことがなかったが、連合王国やEUのようではなくとも、日本においても、多様なアイデンティティが混ざり合っていて、日本という国ができているのである。まずは自分たちの国から、アイデンティティの確立について問題点がないか、アイデンティティの狭間で悩んでいる人や地域もあるかもしれない。そのようなことにしっかりと目を向け、課題や問題と向き合わなければならないと感じた。

●1つの島国に1つの国家がずっと存在している日本とは違い1つの大陸に複数の国家が興亡したヨーロッパのアイデンティティ形成過程において過去存在していた国家が大きく影響をもたらしているということが特質ではないかと考えました。また日本国が存在する諸島に住んでいる人間の血を引いているから日本人、という単純なアイデンティティを当初持っていましたが、特に最後の対面講義の話題であった1つの国家内に複数の民族が存在しているということから日本国が存在する諸島とはそもそもどの地域までなのか、大和民族以外の民族を単純に日本人としてもよいものかと考えるようになりました。また自分で資料を集めて考えていきたいです。

### 3. アンケートに対するコメント

昨年度と同様に、外国史2については12月までコンスタントに対面で授業をすることができたため、その間できるだけ多くの視覚資料を提供しつつ進めた。その成果はアンケートの問7に対する受講生のコメントから明らかである。例えばNHK制作の大英博物館に関する「古代ギリシャ “白い”文明の真実」、また「NHKスペシャル・ローマ帝国 よみがえる幻の巨大都市 帝国誕生の秘密」は、古代ギリシャとローマについての我々のイメージを明確にするために有益であった。特に前者は、古代ギリシャの真実が近代になって隠蔽されたスキャンダルをテーマとしており（所謂エルギン・マーブル洗浄事件）、アイデンティティの操作性について考えさせる非常に良い教材と言える（受講生にも強い印象を与えた様子である。「美術館の動画」のコメント）。また今年度は、受講生には馴染みが薄いと思われるビザンツ帝国についてもDVDを準備した。「NHKスペシャル・千年の帝国ビザンチン～砂漠の十字架に秘められた謎～」を視聴させることで、エジプト・シナイ半島においていまだに帝国の記憶をとどめている修道院があること、正教会とカトリック教会、イスラーム教との関係（それぞれにとって十字軍の持っていた意味）などに触れ、帝国について考えるきっかけを与えることができた。そしてこうした授業中に用いた映像資料に対する評価の高さは、昨年度と同様であった。

授業の具体的な内容については、問5への回答の分布から、やや難しいと感じた受講生がいたことは間違いない。また、問8の回答からは、板書や授業のスピード、資料の表示方法について改善の余地があることが判明した。「毎回の授業での到達目標→まとめがあれば分かりやすかった」との指摘もあった。実際は授業の最初に「はじめに」を用意して目標を説明し、最後に総括を行っているのだが、なぜか回答した受講生にはそれが認識されていないということだ。より明確に論点を強調する必要があるようである。

本授業のテーマであるヨーロッパ・アイデンティティの歴史的形成過程、そしてその特質に関する受講生の思考のあり様は、問9のコメントから推測することが出来る。特に最後に掲載した二つのコメントからは、アイデ

ンティティの「混ざり合い」や時代性について、受講生が深く考察した様子が窺える。そしてヨーロッパについて得た認識を、日本の状況と照らし合わせつつ、自らの問題として捉えている受講生も一定数おり、この点は、記述内容からしても昨年度よりも高く評価できる。今年度の授業内容で大きく変更した箇所はないので、何が奏功したのかよくわからないというのが正直なところであるが（「話題の切り口や雑学のようなものが面白かった」？）、できるだけ現代に生きる我々に身近な事象と比較させながら、授業を進めていくつもりである。歴史との関わり方の具体的実践の一つとして、アイデンティティの歴史的構築過程とその変容を扱っていく本授業では、今後も、学生の思考を深めるような問題提起の仕方、授業内容、そして資料の準備を工夫していきたいと考えている。